

## 王妃テウトベルガの神判について

藤 田 朋 久

### I. はじめに

国王ロタール2世と王妃テウトベルガの離婚騒動については古くから議論が重ねられてきた<sup>1)</sup>。またこの騒動では、テウトベルガが身の潔白を晴らすのにオルダリーを行ったことから、中世神判研究でも注目されてきた<sup>2)</sup>。とくに騒動のさなかに書かれたランス大司教ヒンクマルの論考は、中世をつうじて唯一のオルダリー擁護の書として広く知られている<sup>3)</sup>。

けれども1970年代後半に始まる神判研究の新しい動向のなかでは、この騒動はまだ十分に検討されていない。たとえば、研究刷新の口火を切ったピーター・ブラウンの有名な論文でも、ブラウンは神判に対する神学者の批判を検討しながら9世紀の議論にも触れているが、これを「社会的、知的にまったく異なる環境」のもとで行われたものとしてあえて取り上げていない<sup>4)</sup>。また今日、中世神判の標準的な概説書と目されるロバート・パートレットの書物でも、テウトベルガのオルダリーは神判の全盛期における代表的な事例として筆頭に挙げられてはいるものの、それ以上の検討はされていない<sup>5)</sup>。

本稿は、この騒動およびヒンクマルの論考が、中世神判を理解するうえでどのような意味を持つのかを検討する試みである。ただし、この複雑な事件をここで全面的に扱うことは出来ない。以下では、まず騒動の概要を振り返り、神判研究の観点からその特徴を検討したうえで、さらにヒンクマルの論考を取り上げて、それが持つ意味を考えてみることにしたい。

### II. 騒動の経緯

ロタール2世とテウトベルガの離婚騒動は、858年の訴訟から869年のロタール2世の死にいたるまでの10余年に及んだ。この間、ロタール2世は少なく

とも4回にわたりテウトベルガとの離婚を求めて奔走した。その詳細については古くから研究されてきているが、今なお見解の分かれる点が少ない。ここではのちの議論に必要な限りで、その概略を見ておくことにしたい。

## 1. 結婚、そして最初の離婚訴訟

855年に皇帝ロタール1世が死去すると、ヴェルダン条約で成立した中部王国は3つに分割され、次男のロタール2世が北海からジュラ山地にいたるロタリングアを継承することになった。

ロタール2世は、父の死の直後にはテウトベルガを王妃に迎えている。テウトベルガはボゾの名で知られる親族集団の一員で、兄のボゾはイタリアの伯、もう一人の兄ユベールは、現在はスイスのヴァレー州にあるサン＝モリス修道院の俗人修道院長だった<sup>6)</sup>。テウトベルガとの結婚は、ロタリングアの南方への守り、とりわけロタール2世の兄ロドヴィコ2世が支配するイタリア王国に対して守りを固めるという、政治的な意図を持つものだったと考えられている。

しかし、この結婚はその後2年と続かずに終わることになった。それには様々な理由が考えられている。ひとつには、テウトベルガがこの間、子供をもうけなかったことがある。後継者となる男子を得るかどうかは、むろん王国の存続にかかわる重大問題であった<sup>7)</sup>。加えてもうひとつの理由として、テウトベルガとの結婚がロタール2世自身の意を汲むものではなく、むしろ彼の意に反して押し付けられたものだったと考えられる点がある<sup>8)</sup>。さらに決定的だったのは、ロタール2世が父の生前からワルドラーダという女性と内縁関係を持ち、やがて彼女とのあいだに子供をもうけたことがあげられる<sup>9)</sup>。

サン＝ベルタン年代記によれば、857年のおそらく9月には、国王は王妃と別居している<sup>10)</sup>。さらに857年末には、ロタール2世はテウトベルガの兄ユベールに対して軍事遠征を実施している<sup>11)</sup>。そして翌858年には、テウトベルガは婚姻の正統性をめぐり国王の法廷で裁かれることになった。

858年の裁判には、そこにいたる準備工作があった。王妃との別居も工作のひとつであったろう。だが重要なのは、テウトベルガに対してある噂が流布したことである<sup>12)</sup>。テウトベルガは、ロタールと結婚する以前に兄ユベールとのあいだで近親相姦の罪を犯し、墮胎していたとの噂が広まったのである。ロタールにこの噂を告げる者があり、テウトベルガは王妃としてふさわしくないとの忠告がなされた<sup>13)</sup>。

そこで国王はこの噂について貴族らと協議し、アーヘンの王宮で法廷を開く

ことになった。しかしテウトベルガは罪状を否認。証人もいないなか、熱湯のオルダリーを実施することが決定される<sup>14)</sup>。テウトベルガは代理人を立てて熱湯審に臨んだ。その結果は無罪と判定され、彼女はふたたび王妃の地位を回復した。

## 2. アーヘン教会会議と婚姻無効の認定

858年の法廷では、テウトベルガは神判によって身の潔白を晴らした。しかし、それにもかかわらず事態は決着しない。国王ロタールは再度、離婚を試みるのである。

サン＝ベルタン年代記によれば、復権したはずのテウトベルガは監禁され<sup>15)</sup>、ケルン大司教グンターが王妃の告解聴聞師につくことになった<sup>16)</sup>。のちにテウトベルガが教皇ニコラウス1世にあてた書簡によると、彼女はこの間、自らの罪を認めるよう脅迫されていたらしい<sup>17)</sup>。

他方で、テウトベルガの罪をめぐってふたたび噂が流される。のちにヒンクマルの論考に収録された860年のアーヘン教会会議の要録によれば、ロタールはオルダリーの結果を偽りと知りながらも受け入れ、甘受したが、その後もブルゴーニュやイタリアでテウトベルガの噂が絶えなかったという<sup>18)</sup>。

こうして860年の1月と2月にアーヘンで教会会議が招集され、テウトベルガに対する疑惑がふたたび審議されることになった<sup>19)</sup>。858年の裁判とは異なり、今回はテウトベルガが自ら罪を認めて告白した。まず1月の会議で、グンターがテウトベルガの告解聴聞師として彼女の私的告解の内容を暴露し、彼女の罪が公にされた。さらに2月の会議では、テウトベルガ自身が公に告解をおこない、その内容を記した文書を国王に提示した<sup>20)</sup>。これをうけて司教たちは、テウトベルガに修道院への隠遁と公的贖罪とを課した。

860年の教会会議では、テウトベルガの罪が認定された。しかしテウトベルガとの婚姻の無効性や、ロタール2世の再婚の許可はまだ出されてはいない。これが認められるのは、862年4月にアーヘンで開かれた3回目の教会会議においてである<sup>21)</sup>。テウトベルガは結婚前に近親相姦を犯したことを自身で公に告白したのだから、もはや正統な妻とは認められず、婚姻は無効であり、ロタールは再婚することも可能と判断された。そしてこの会議の決定を受けて862年秋には、ロタールはワルドラーダを王妃として正式に迎えることになった<sup>22)</sup>。

### 3. その後の展開

ロタール2世は、こうしてテウトベルガとの婚姻を解消し、ワルドラダを王妃に迎えたのだが、それもまた束の間に過ぎない。こののち騒動は国際的な広がりを見せ、東西フランク王や教皇の介入によって複雑に展開することになる。

東西フランク王、とくに西フランク王シャルル・ル・ショーヴは、860年2月の第2回アーヘン教会会議のあと修道院を逃れたテウトベルガを王国に迎え入れ、兄ユベールとともに保護を与えている<sup>23)</sup>。またこの間には、ロタリングアの貴族や司教たちの質問に答えて、ランス大司教ヒンクマルが自身の見解を述べた論考も公表された。そうしたなか、ロタール2世は教皇ニコラウス1世に使者を送り、テウトベルガとの離婚の承認を教皇に求めようとした<sup>24)</sup>。しかしロタールの期待に反して、教皇はロタールの離婚を認めた教会会議の決定を無効とし、関与したケルン大司教グンターとトリアー大司教トイトガウトを罷免。さらに865年にはテウトベルガを王妃に復権させ、他方でワルドラダを破門してしまう<sup>25)</sup>。

ロタール2世は、こうしてテウトベルガを再び王妃に迎えるほかなかったが、転機となったのは867年にニコラウス1世が死去し、新教皇にハドリアヌス2世が就いたことだった。ロタール2世は、兄の皇帝ロドヴィコ2世の仲介で869年にハドリアヌス2世とモンテ＝カッシーノで会見。さらにローマに行き、離婚問題を審議する新たな教会会議を870年にローマで開催する約束を取り付けることに成功する<sup>26)</sup>。その後、ロタール2世は帰路についたが、彼の一行はルッカで熱病にかかり、ロタール自身はピアツェンツァまで進んだが、そこで死去した<sup>27)</sup>。そしてロタールの死とともに、ロタリングアは東西フランク王によって分割され、消滅することになった。

### Ⅲ. 神判研究の観点から

ロタール2世とテウトベルガの離婚騒動には、神判研究から見てどのような特徴があるといえるだろうか。

まず注意しなければならないのは、この騒動で神判が問題となるのは、858年のテウトベルガの熱湯審だけではないという点である。というのも865年にテウトベルガが王妃に復帰したあとも、ロタール2世はまだ離婚をあきらめず、テウトベルガを姦通罪で訴えて、法廷決闘で決着することを目論んでいたとい

われるからである<sup>28)</sup>。さらに869年にロタール2世が熱病で死去したときにも、これを神の裁きとする言説が流布した。ロタール2世はモンテ＝カッシーノでハドリアヌス2世に面会した際、教皇にミサを依頼し、聖体拝領に授かった。その際、ロタールは教皇からワルドラーダのことを聞かれ、破門されたワルドラーダには会っていないと嘘をついたとされる。ロタールがその後むかえた突然の死はここに起因するのであり、聖体のオルダリーをつうじて神判が下されたと思なされたのである<sup>29)</sup>。

こうして見ると、858年のテウトベルガのオルダリーは、騒動のなかのひとつのエピソードにとどまらないことがわかる。むしろこの騒動全体が巨大な神判の物語をなしており、テウトベルガのオルダリーもそのなかで考える必要がある。

だがこの騒動が何より興味深いのは、テウトベルガのオルダリーが一度結果を出しながら、その結果がのちに全くないがしろにされてしまったことであろう。ピーター・ブラウンは、本稿の冒頭で触れた論文で、神判の従来のイメージを刷新した<sup>30)</sup>。それまでは、神判はいわば運まかせであり、白黒いずれにせよ、実施すれば結果が出るものと考えられてきた。それに対してブラウンが注目したのは、オルダリーの結果自体は「曖昧」であり、解釈に開かれているという点である。たとえばテウトベルガの代理人が行った熱湯審を例にとっても、沸き立つ湯に手を入れれば誰もがやけどを負うはずであり、手を布に巻いて封印し、3日後にその傷を見ても、結果は白黒つけがたく曖昧なはずである。ところが本来曖昧なはずの神判の結果が、神の裁きを明白に告げるものと見なされる。これはどのように説明できるのだろうか。ブラウンによれば、曖昧な結果が意味を持つためには、人々のあいだで事前に暗黙の合意が成立していなければならない。それは法廷でオルダリーが提案され、実施されて、その結果を判定するまでのあいだに、紛争当事者や第三者を含む人々のあいだで行われるインフォーマルな議論をつうじて形成される。そして人々のあいだに生まれたコンセンサスが神判の結果に読み込まれる。すると曖昧なはずだったオルダリーの結果が、神の明白な裁きとなる。しかもそれは神の裁きであり、すでに人間の手を離れているために、敗者も面目を保つことが出来る<sup>31)</sup>。

ブラウンの研究史上の功績は、オルダリーを貫く社会性をはじめて指摘した点にある。神判の背後にあって、それを支える社会的プロセスを分析する道が開かれた。しかしブラウンの説をめぐっては、その後さまざまな検討が行われ、問題点も指摘されてきた<sup>32)</sup>。それをいま定式化するなら、次のように言えるだろう。ブラウンの言うようにオルダリーの結果が曖昧なら、それが意味を持つ

ためには、あらかじめ人々のコンセンサスが必要である。しかしオルダリーはまさに人々が容易に合意できないからこそ行われるのであり、合意できるならオルダリーはそもそも実施されないはずである<sup>33)</sup>。

これはオルダリーのアポリアとも呼べる問題である。そしてオルダリーの結果の曖昧さを前提にするなら、問題を解く鍵はひとつしかないと思われる。すなわちオルダリーの曖昧な結果が確定し、意味を持つためには、ブラウンが考えたようにコンセンサスが必要だが、それは彼が想定したような全員一致ではなく、どこかで結果の判定に不満を持つ人々が排除されているはずである。けれども、そのことを史料に即して具体的に明らかにすることは容易ではない。というのも、一般にオルダリーを記録した史料は、オルダリーの勝者の側から書かれているからである。不満を持つ人々がいたとしても、その声は史料からは消されてしまい、その結果、あたかも全員が一致したかのように見える。すると、ここからどう研究を進めればよいのか。

この点で注目されるのが、オルダリーがうまく機能せずに失敗してしまう事例である。これには二つの場合がある。まず、オルダリーを実施しても結果の判定に異論が噴出し、結果自体が確定しない場合がある<sup>34)</sup>。またたとえ結果が確定し、判決が出されても、それがないがしろにされてしまい、紛争がさらに続く場合もある<sup>35)</sup>。このような事例は数の上では少数だが、そうした事例が存在すること自体、オルダリーの結果の曖昧さに着目するブラウンの説明を裏付けているともいえる。またこうした事例を分析して、なぜオルダリーが失敗してしまうのか、そこにある社会的プロセスを明らかにすることが出来れば、逆にオルダリーが意味を持つということが、どういうことなのかを照らし出すこともできるに違いない。テウトベルガのオルダリーとは、まさにそうした失敗してしまったオルダリーの大掛かりな事例といえるのである。

そこで858年のテウトベルガのオルダリーをあらためて検討してみよう<sup>36)</sup>。たとえばテウトベルガの代理人が熱湯審に臨み、その結果が白と判定されたのはなぜなのだろう。それは偶然そのような結果になったということなのか。それともブラウンが言うように、結果自体はやはり曖昧だったのだろうか。ロタールの宮廷には、国王と王妃それぞれを支持する者たちがいて、このときはテウトベルガの支持者たちが優ったということなのか。また逆に、860年のアーヘン教会会議で熱湯審の結果がないがしろにされたのは、どこかで形勢が逆転し、ロタールを支持する側が巻き返したということなのだろうか。

テウトベルガのオルダリーの判定をめぐる両派のこうした争いを具体的に明らかにすることはむずかしい。858年のオルダリーに関する史料はわずかし

残されていないために、ロタールの宮廷で何が起きていたのかを探ることは困難である。しかしロタールの宮廷が一枚岩ではなく、そこには勢力のせめぎあいがあり、しかもそれがきわどいものだったことを推測させる痕跡は残されている。たとえば、近年カール・ハイデッカーも指摘するように、858年の熱湯審の結果に関する全員一致への配慮などもそうした例である<sup>37)</sup>。860年にヒンクマルに送られた質問状や、それに対するヒンクマルの回答を読むと、858年の国王の法廷でオルダリーの実施が決められた際にも、またその結果が無罪と判定された際にも、貴族による判決のほかに、司教たちの助言、さらに国王の同意があったことが記されており、そこには全員が承認し、少なくとも異議が出されないことを重視した様子が伺われるのである<sup>38)</sup>。しかしそのように慎重を期したはずの判決も、2年後の教会会議では覆されてしまう。そしてこのときには、会議の決定に疑問や不満を持つ人々がいたことは、彼らがヒンクマルに意見を求めたことからわかる<sup>39)</sup>。

ところでオルダリーの結果の判定をめぐる争いには、対立する当事者たちが直接ぶつかり合う場面のほかにも、第3者の支持を取り付けるということがある。すでに見たように、ロタールとテウトベルガの紛争では、第3者の支持を獲得するために様々な工作が行われている。ロタールもテウトベルガも、東西フランク王や教皇に使者や書簡を送って承認や保護を求めているし、またヒンクマルをはじめとする王国外の司教たちに働きかけがあったことも知られている<sup>40)</sup>。だがそうした働きかけにもまして興味深いのは、オルダリーの結果の判定により密接にかかわる工作があったことである。それは858年のオルダリーの結果が、実は偽りだったという噂が流されたことである。そしてそうした噂の内容が、それに対するヒンクマルの見解とともに残されている。この点を見てみよう。

#### Ⅳ. ヒンクマルとその論考について

『国王ロタールと王妃テウトベルガの離婚について』と呼ばれる論考が執筆されたのは、860年に二度にわたりヒンクマルに質問状が寄せられ、それに彼が回答することになったからである<sup>41)</sup>。一度目は、860年2月から4月にかけて送られた8章からなる質問状で、ヒンクマルはまずこれに対する回答を執筆し、それが論考の第1部となっている。さらに最初の質問状から6か月後、860年8月から10月ごろに送られてきた7章からなる第2の質問状があり、これがヒンクマルの回答とともに論考の第2部となっている。ヒンクマル

は、二つの質問状の回答に序論と結論を書き加え、さらに追記や修正をおこなって、860年11月までには論考全体を完成している。

質問状の送り主は誰なのだろうか。ヒンクマールの序論を読むと、ロタリングアの「高位の聖職者と俗人」とされるだけで詳細は分らない。彼らは自分たちの名前を出さずに匿名にするようヒンクマールに求めているからである<sup>42)</sup>。だが先述のように、こうした質問状が送られたこと自体、860年に開催されたアーヘン教会会議の決定に対して疑問や不満を持つ勢力がロタールの宮廷内にいたことを示している。

論考の構成は、基本的に質問状の章立てに沿って書かれている<sup>43)</sup>。まず、婚姻の成立とその解消、および再婚の法的条件など、婚姻をめぐる問題が扱われている。また離婚訴訟における訴訟手続きに関する質問もあり、このなかには1章全体がオルダリーにあてられている。さらに世俗と教会の裁治権に関する問題や、国王の責任をめぐる問題なども扱われている。

論考をつうじてあらわれるヒンクマールの基本的な姿勢はどのようなものなのか。全体として言えば、ヒンクマールは860年1月と2月のアーヘン教会会議の決定に対して否定的であるといえる。とくにそこで取られた手続きには問題があったという立場である。婚姻解消の可能性についても、テウトベルガの罪が明らかにされるのであれば、それを否定しないにしても、現状ではそれは明らかになっていないと考えている。858年に実施されたテウトベルガのオルダリーに関しても、王妃を無罪とする判定を基本的に支持している。

こうしたヒンクマールの姿勢については、これまでも様々に議論されてきた。一方では、ヒンクマールの背後に西フランク王の存在を見ようとする議論がある<sup>44)</sup>。また他方では、ヒンクマールに政治的な思惑を見ることを批判し、神学や法学の純粋に理論的な観点から書かれたとする評価もある<sup>45)</sup>。

ところで、こうした評価が互いに対立しながらも、いずれもヒンクマールの反ロタールの立場を前提としているのに対して、ヒンクマールにより柔軟で中立的な姿勢を見ようとする議論が近年おこなわれている<sup>46)</sup>。ヒンクマールは、ロタールを支持したとまでは言えなくとも、流動的な状況のなかでロタールとテウトベルガのどちらか一方にコミットすることを避けようとした節があり<sup>47)</sup>、ロタールに対しても一定の譲歩の余地を残しているのではないか。この複雑な問題をここで全面的に扱うことは出来ないが、以下では問題をオルダリーに限定して考えてみよう。

オルダリーについては一回目の8章からなる質問状の第3章で扱われており、ヒンクマールは質問をさらに四つに分けて回答している<sup>48)</sup>。まずオルダリーの



正統性の問題がある。さらに個別の問題が二つあって、ここで当時人々のあいだで流布していた噂、すなわちオルダリーの結果が実は偽りだったという噂が語られている。そして最後に、もしもオルダリーで不正が行われたのなら、再審に付すことができるのかという問題がある。

最近、レイチェル・ストーンとチャールズ・ウエストは、こうした問いに対するピンクマールの回答を検討して、ピンクマールはオルダリーが正統な手続きであり、858年のテウトベルガのオルダリーの結果も尊重されるべきだと述べてはいるが、他方では悪魔の介入によってオルダリーの結果が歪められる可能性も認めており、もしもそのようなことがあったなら、さらなる審理も排除してはいないことに注目している。そしてここにピンクマールのロタールに対する配慮を見ようとしている<sup>49)</sup>。

ところでオルダリーの結果が偽りだったと当時人々が噂していたというのは、一体どういうことなのか。これには二つある。ひとつは、テウトベルガはたしかに兄ユベールと近親相姦の罪を犯したのだが、すでに私的に告解し、贖罪していたために、その罪は赦されていた。それゆえ彼女は無実を宣誓し、オルダリーの結果も無罪となったというものである<sup>50)</sup>。もうひとつは、テウトベルガはオルダリーで宣誓し、兄ユベールとの近親相姦を否定したが、じつは彼女はユベールという名の別の人物を知っており、宣誓の際にはもう一人のユベールを念頭に宣誓した。だからオルダリーの結果は無罪となったというのである<sup>51)</sup>。

注意しなければならないのは、これらの噂がいずれもオルダリーの結果を偽りとしながらも、オルダリー自体を否定してはいない点である<sup>52)</sup>。たとえばテウトベルガが告解と贖罪により神に赦されていたのなら、彼女を無罪としたオルダリーの結果はその限りでは正しい。ただ問題は、そうした事情を知る者が、テウトベルガの他にはいないという点である。オルダリーの結果の真の意味は、テウトベルガと神とのあいだに閉ざされてしまっており、外からうかがい知ることが出来ない。そのために人々は、オルダリーの結果をテウトベルガの全面的な潔白を示したものと考えてしまう。

こうした噂は、いったい誰が言い出したのだろうか。その答えをピンクマールの論考のなかに見つけることは難しい。けれどもこの噂は、858年のオルダリーで敗退したロタールの支持者たちが言い出したと考えることは十分に可能であろう。858年のオルダリーでは、結果は確定したものの、そのことに不満を持つ人々がいたことは明らかだからである。彼らにとっては、オルダリーの結果がすでに確定した以上、テウトベルガの問題をふたたび審理に付すことは

難しかったに違いない。そのためにはオルダリーの結果自体を否定しなければならず、そこでこのようなことが言われるようになったのではないだろうか。そのように考えるなら、ここには一般に史料には残ることのない、敗者の言い分が顔をのぞかせていると言えよう。それは事態が二転三転し、858年には敗者だったロタールとその支持者たちが、860年の教会会議では勝者となり、逆に敗者となったテウトベルガの支持者たちがヒンクマルに質問状を送る。そうしたなかで、オルダリーに敗れた側の言い分が例外的に記録に残されたのである。

ところでヒンクマルは、こうした噂に対して聖書をはじめとする文献を総動員して論駁するのだが、ここではヒンクマルの議論を三つのポイントに絞って見ておくことにしよう。

- (1) ヒンクマルはまず、これらの噂がオルダリーの結果を一概に否定してはいない点を取り上げる。先述のように、これは告解の場合にも、同名の別人の場合にも言えることで、オルダリーの結果がある意味で正しいことは噂でも認めている。すると噂する人々は、オルダリーの結果を正しいと言いながら、同時にそれを偽りだと言っていることになる<sup>53)</sup>。オルダリーを神判と考えるヒンクマルからすれば、それは神を讃えながら、じつは貶す態度であり、認めることは出来ない。
- (2) ヒンクマルは心と口の分離を認めない。人間にとっては、他人の心の内を見ることは出来ず、宣誓の言葉を聞いても、宣誓者が何を考えているのかはわからない。けれども神の前ではそのようなことはあり得ない。オルダリーでは、宣誓者は神の前で誓うのであり、神の目には心の内まで明らかなからである<sup>54)</sup>。
- (3) ヒンクマルはさらに、噂されるような疑問を持つこと自体を問題視する。オルダリーにおいては神が判断を下すのであり、それを疑うということは、疑う者の信仰心の無さを示すことに他ならない<sup>55)</sup>。

ヒンクマルの議論の最大の特徴は、神の超越性を強調する点にある。先述のように、噂する人々が問題にするのは、オルダリーの結果の意味がテウトベルガと神のあいだで閉ざされていることであった。これに対してヒンクマルは、そうした私的な閉域を社会のなかに認めない。超越的な神のもとで、オルダリーを通して表も裏もない公共性が確保されていることを示そうとする。そしてそこから噂する人々の問題構成そのものを解体してしまうのである。

ヒンクマルの議論の特徴をさらに明らかにするためには、9世紀の他の議論、とくにアゴバルとの比較が重要である<sup>56)</sup>。また12世紀以降の神学者や教会法学者の議論との比較も必要になる。ここではその詳細に入ることは出来ないが、12世紀以降との関連で言えば、まず気づくのは、告解による場合も、名前の二重性による場合も、テウトベルガのオルダリーの結果を否定する噂の内容が、12-13世紀の問題構成と基本的に同じだという点である<sup>57)</sup>。ただし問題に対する解法は、9世紀と12-13世紀とではまったく異なっている。グラティアヌス以降の教会法学者や神学者が、内面や意図を重視し、そこを基点にして公的世界を構想しようとするのに対して、ヒンクマルは個人の内面を問題とせず、もっぱら神の問題として論ずるからである<sup>58)</sup>。

最後に、先述したストーンとウエストの指摘についても見ておこう。彼らはオルダリーの結果が悪魔によって歪められることをヒンクマルも認めており、そうした場合には問題を再審に付すことも可能だとしている点に注目した。そしてそこにロタルに対するヒンクマルの譲歩を見ようとする。

これはロタリンギアの質問者たちに対する四番目の回答で述べられていることである。質問者たちは、もしもオルダリーで不正が行われたのなら、一度無罪とされた事案をふたたび審理することが出来るのかと問うていた<sup>59)</sup>。この問いに対して、ヒンクマルは「悪魔の働きによってオルダリーでごまかしがあったかも知れないことは認めよう」と述べ、その場合には再審に付すよう勧めている<sup>60)</sup>。つまりヒンクマルは、私的な告解や名前の二重性からオルダリーの結果が偽りだったとする噂は否定する一方で、悪魔の働きに関しては、オルダリーの結果が歪められることもありうると譲歩しているわけである。するとヒンクマルは、やはりロタルに譲歩したといえるのだろうか。

まず注意すべき点は、「偽り」といい、「ごまかし」といっても、その性質が異なることである。私的な告解や名前の二重性によるオルダリーの意味の改竄は、文学史ではトリック・オーディール *tricked ordeal* と呼ばれるものである<sup>61)</sup>。その特徴は、オルダリーの機構自体には手を触れずに、オルダリーの結果の意味を変えてしまうことにある。オルダリーは正しい結果をもたらすのだが、その本当の意味は人々の目には隠されており、そのために人々はオルダリーの結果を誤って解釈してしまう。それに対して悪魔の介入でオルダリーの結果が改竄されるのは、オルダリーの機構自体が歪められるからである。オルダリーの働きは阻害されてしまい、正しい結果ではなく、偽りの結果がもたらされてしまう。

これらはいずれも由々しいことには変わらない。しかし一見すると、それら

に対するヒンクマルの態度は異なっているように見える。私的な告解や名前の二重性については、ヒンクマルは人々の噂を否定するのに対して、悪魔の介入による改竄については、その可能性を認めているからだ。これはどう説明できるのだろうか。

おそらくその理由は、悪魔の存在が、ヒンクマルにとって現実的な脅威だった点にあると思われる。これはヒンクマルが論考の他の箇所、ロタリンギアの質問者たちに答えて、男女のあいだで愛憎を生み出す呪術 *maleficia* について論じた箇所からもわかる。ワルドラダを念頭に置く質問者たちに対して、ヒンクマルは自身の見聞にも触れながら、呪術によって悪魔が介入し、憎しみが生じたり、愛情が生まれることは現実にあると答えている<sup>62)</sup>。またよく知られるように、カロリング教会は神判のなかでも法廷決闘を禁止すると同時に、オルダリーについてはこれをキリスト教化しようとしたが、そのひとつの表れといえるのが、9世紀以降に作成されたオルダリーの典礼書で、それらを見ると、呪術を用いることへの警告や、悪魔の介入に対する警戒であふれている。

ところでこうした悪魔の脅威を前提にすると、先に述べた区別が重要性を帯びてくる。すなわち私的告解や名前の二重性の場合とは違って、悪魔の介入の場合には、オルダリーの機構自体が改変されてしまうという、このことが重要だったのではないか。ヒンクマルにとってオルダリーとは、それを通じて神の判断が示される場であり、それを支えにして社会が維持される。それが棄損されてはならない。逆に言えば、もしも悪魔の介入によってオルダリーの働きが阻害されたのなら、さらなる審議がなされなくてはならない。それはヒンクマルにとっては、理性に適った当然のことだったのではないだろうか<sup>63)</sup>。

ヒンクマルにとって何より重要なのは、超越的な神のもとで、オルダリーを通じて公共性が確保されることである。この点から見ると、トリック・オーディールの場合に噂を否定することと、悪魔の介入を認めて再審の可能性を肯定することは、ロタールやその支持者への対応としては一見相反するのに見えて、実は同じことの別の表れに過ぎなかったのではないか。これはストーンとウエストも別の箇所で述べているのだが、ヒンクマルの態度を、それがロタール寄りか、反ロタールかという次元だけで見ていると、その全体像を見誤ってしまう<sup>64)</sup>。

ヒンクマルの議論が際立つのは、超越的な神のもとで公共性を確保しようとすることであり、それはまた神のもとで異論を克服することであった。これはピーター・ブラウンの表現を用いるなら、コンセンサスを作り出す努力とも

言い換えられよう。しかしこの点で、ヒンクマールは結局コンセンサスを作り出せなかったと言わねばならない。神判であるはずのオルダリーの結果をもってしても、紛争は収まらないばかりか、オルダリーの結果自体がないがしろにされてしまったのである。860年のアーヘン教会会議の要録を見ると、ロタール2世やその支持者たちは、858年のオルダリーの結果が神の判断だったことは認めている。しかしそのうえで、「神は寛大にも真実を明るみに出すことを欲しなかった」とし<sup>65)</sup>、ロタールはオルダリーの結果が偽りと知りながらも甘受したと言っているのけるのである。そしてオルダリーの結果によってテウトベルガの噂が収まることを期待したもの、その後も噂が絶えないので、再度審理することになったのだと。こうして860年の教会会議ではテウトベルガの罪が認定され、さらに862年になると婚姻の無効性も認められて、ロタールはワルドラダと再婚する。ここに至って、ヒンクマールの論考は事態の進展に先を越されてしまうのである。

## V. おわりに

ロタール2世とテウトベルガの離婚騒動は、神判の事例としては空前絶後ともいえる規模のものだった。オルダリーの結果で王国の命運が決まるという、オルダリーに掛けられた掛け金の大きさはもとより、そこに関与した人々の広がりや、また問題が決着するまでにかかった時間の長さ、どれをとっても異例に大きい。そしてこの事例は、神判を理解するうえで多くのヒントを我々に与えてくれる。

まず神判が意味を持つということが、いかに一筋縄ではいかないかがよく分かる。ブラウンが注目したように、オルダリーの結果は、それ自体では何の意味も持たず、オルダリーを実施しさえすれば紛争が収拾されるわけではない。そのためには、ブラウンの想定をも越えて、紛争当事者たちが相手を圧倒し、不満や疑問を排除できなければならないのである。それは外交に始まり、贈物や買収、さらには脅迫や拷問にいたる様々な工作によるのであり、この騒動をつうじてオルダリーを取り巻くそうした側面を垣間見ることが出来る。

この騒動はまた、オルダリーで敗れた者たちの言い分が記録されている点でも稀有な事例である。呪術や悪魔の介入から、私的告解や名前の二重性にいたるまで、テウトベルガのオルダリーをめぐる様々な噂が流布した。これらはオルダリーの正統性やその結果の意味を無効にしまうものであり、オルダリーの意味や解釈をめぐる熾烈な争いが闘われたのである。重要な

は、オルダリーの全盛期と呼ばれる時代に、こうした疑問が示されていたことである。オルダリーは中世人にとっても決して自明ではなく、こうした疑問と表裏一体だったのであり、疑問とのせめぎあいの上に成り立っていたと理解しなければならない<sup>66)</sup>。

最後に、オルダリーの意味をめぐる争いのなかで、人々はいかにしてコンセンサスを作り出すことができるのか。ヒンクマルの論考を通じて、我々はこの問いに対するひとつの回答を見ることが出来る。ヒンクマルの論考は、これまではもっぱら婚姻をめぐる教会法の歴史のなかで取り上げられてきた。ヒンクマルが神の超越性のもとにオルダリーを擁護し、オルダリーを通じて紛争を収束させようと努めたことは、中世人の非合理性を示す不可解なこととしてほとんど無視されてきたと言ってよい。しかしオルダリーの理解が変わりつつある現在、ヒンクマルのテキストは改めて読み直される必要がある。今回はその詳細には入れなかったが、改めて別稿を用意したい。

## 註

- 1) この騒動に関連する文献は膨大であり、ここですべてを挙げることは出来ないが、まず政治過程に関する古典的な研究として、R. Parisot, *Le royaume de Lorraine sous les Carolingiens* (843-923), Paris, 1899. および J. Calmette, *La diplomatie carolingienne du traité de Verdun à la mort de Charles le Chauve*, Paris, 1901. が挙げられる。Parisot の研究は E. Dümmler をはじめとする先行研究を踏まえて書かれており現在でも有益である。最近の研究としては、K. Heidecker, *The Divorce of Lathar II. Christian Marriage and Political Power in the Carolingian World*, Ithaca, 2010. を参照。また婚姻をめぐる教会法の観点からこの紛争を扱った古典的研究として、P. Daudet, *Études sur l'histoire de la juridiction matrimoniale. Les origines carolingiennes de la compétence exclusive de l'Église*, Paris, 1933. この紛争にかかわる教皇ニコラウス 1 世に関連する文献は多い。ここではとりあえず、D.L. D'Avray, *Papacy, Monarchy and Marriage, 860-1600*, Cambridge, 2015; Idem, *Dissolving Royal Marriages. A Documentary History, 860-1600*, Cambridge, 2014. を参照。なお近年、この紛争は新たな問題関心のもとで盛んに研究されている。たとえば「身体」をキーワードにして政治の象徴論的な次元を論じたものとして、S. Airlie, "Private Bodies and the Body Politic in the Divorce Case of Lothar II", *Past & Present*, 161, 1998, pp. 3-38; G. Bühner-Thierry, "La reine adultère", *Cahiers de civilisation médiévale*, 35, 1992, pp. 299-312. あるいはジェンダーやセクシャリティの観点から、R. Mazo Karras, *Unmarriages. Women, Men, and Sexual Unions in the Middle Ages*, Philadelphia, 2014; R. Stone, *Morality and Masculinity in the Carolingian Empire*, Cambridge, 2012. さらにロタリンギアという中間王国の問題として、S. MacLean, "Shadow Kingdom: Lotharingia and the Frankish World, c.850-c.1050", *History Compass*, 11, 2013, pp. 443-

- 457; R. Le Jan, “L’aristocratie lotharingienne au X<sup>e</sup> siècle: structure interne et conscience politique”, in *Lotharingia. Eine europäische Kernlandschaft um das Jahr 1000. Une région au centre de l’Europe autour de l’an Mil*, eds. H.-W. Herrmann, R. Schneider, Sarrebruck, 1995, pp. 71–88. 邦語文献としては、森義信「フランク時代の裁判風景（2）王妃離婚訴訟とロタール王国の消滅」『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要）3, 1995, pp. 25–39. また次の訳書も参照。U. ファルクほか編著『ヨーロッパ史の中の裁判事例：ケースから学ぶ西洋法制史』（第6章：ロタール2世の婚姻紛争）ミネルヴァ書房、2014年。
- 2) 神判研究でこの紛争に触れるものは多い。ここでは初期の研究として、A. Esmein, “Les ordalies dans l’Église gallicane au IX<sup>e</sup> siècle. Hincmar de Reims et ses contemporains”, *École pratique des hautes études. Section des sciences religieuses*, 1897, pp. 1–27.
  - 3) ヒンクマルの論考は長らく Migne の版が使われてきたが、現在では、Hinkmar von Reims, *De divortio Lotharii regis et Theutbergae reginae*, ed. Letha Böhringer, M.G.H. *Concilia* 4, supplementum 1, Hannover, 1992. (以下 *De divortio* と略す)。また最近、次の英訳が出版された。*The Divorce of King Lothar and Queen Theutberga. Hincmar of Rheims’s De Divortio*, tr. R. Stone and Ch. West, Manchester, 2016. 特に Introduction が有益である。
  - 4) P. Brown, “Society and the Supernatural. A Medieval Change”, in *Society and the Holy*, Berkeley and Los Angeles, 1982, p. 308, n.16 (この論文は1975年に雑誌 *Daedalus* に発表された)。ブラウンがここで論じているのは12世紀の神判批判であり、それに対して9世紀のアゴバルの批判を念頭に「まったく異なる」と書いていると思われる。この判断はその限りでは正しい。
  - 5) R. Bartlett, *Trial by Fire and Water. The Medieval Judicial Ordeal*, Oxford, 1986, pp. 13–14. バートレットは、9世紀から12世紀までを神判の全盛期としてひと続きの時代ととらえている。なお、ブラウンの研究をめぐる論争の当事者であるチャールズ・ラディングの論文にも、アゴバルやヒンクマルについて短い言及がある。Ch. Radding, “Superstition to Science: Nature, Fortune, and the Passing of the Medieval Ordeal”, *American Historical Review*, 84, 1979, p. 946.
  - 6) Bosonids については、C.B. Bouchard, “The Bosonids or Rising to Power in the Late Carolingian Age”, *French Historical Studies*, 15, 1988, pp. 407–431; F. Bougard, “En marge du divorce de Lothaire II: Boson de Vienne, le cocu qui fut fait roi?”, *Francia*, 27, 2000, pp. 33–51. Hubert については、Parisot, pp. 83–85; Heidecker, pp. 59–62.
  - 7) この問題については、Parisot, pp. 143–145; Heidecker, pp. 64–65.
  - 8) これはのちにロタール自身、教皇ニコラウス1世あての書簡で述べていることである。Cf. Parisot, pp. 87–88.
  - 9) ワルドラダについては不明な点が多い。一般にはアルザス地方の貴族の生まれだったと考えられている。ワルドラダに関して、現在では次の研究を参照。L. Dohmen, *Die Ursache allen Übels. Untersuchungen zu den Unzuchtswürfen gegen die Gemahlinnen der Karolinger*, Ostfildern, 2017, pp. 183–187. ロタール2世はワルドラダとのあいだに息子1人と娘3人をもうけた。Parisot, pp. 145–146; Heidecker,

- p. 52, n.5.
- 10) *Annales Bertiniani*, a.857, M.G.H. SS 1, p. 450 (Lotharius concubinis abutens, uxorem suam reginam abicit.)
  - 11) ユベールに対する軍事遠征については、Parisot, pp. 119-120; Heidecker, p. 63. またユベールと決裂したあと、Bosonids に代わってロタール 2 世を支えた母方の伯父 Liutfridus とその親族 Etichonids について、Heidecker, p. 69 を参照。
  - 12) テウトベルガに関する噂は、860 年のアーヘン教会会議の要録のなかで触れられている。これは 860 年に書かれたヒンクマルの論考に収録されて唯一伝わっているものである。*De divortio*, pp. 119-120 (Textus libelli septem capitulorum, c.1 et 2).
  - 13) テウトベルガの罪状についても論ずべき点が多いが、ここでは次を参照。Heidecker, pp. 67-68; Stone and West, Introduction, pp. 54-64; Z. Mistry, *Abortion in the Early Middle Ages, c.500-900*, Woodbridge, 2015, pp. 238-261.
  - 14) 王妃が性的逸脱で訴えられオルダリーを行うという話は、事実としてもフィクションとしても中世を通じて多く語られている。ただしトリスタン物語のイゾーの場合のように、一般には熱鉄審や、さらに特徴的には熱した鋤の刃を用いることが多い。Bartlett, pp. 16-19.
  - 15) *Ann.Bert.*, a.858, M.G.H. SS.1, p. 452 (Lotharius rex, cogentibus suis, uxorem quam abiecerat recepit, nec tamen ad thorum admittit, sed custodiae tradit.)
  - 16) グンターについては、Parisot, pp. 151-152; Heidecker, p. 74.
  - 17) テウトベルガの書簡自体は残されていない。これは教皇ニコラウス 1 世が特使たちに送った書簡のなかで触れており、そこから間接的に知られる。*Commonitorium ad legatos*, M.G.H. Epp. 6, p. 277. Cf. Parisot, p. 147, n.4 ; p. 153, n.1.
  - 18) *De divortio*, p. 120 (Textus libelli septem capitulorum, c.2) ; pp. 121-122 (Tomus prolixus, c.16).
  - 19) 860 年の二つの教会会議については、上記の註 12 に記したように、その要録がヒンクマルの論考のなかに収録されて伝わっている。最初は国王の世俗法廷で裁いたものをなぜ教会会議で再審に付すのかについては様々に議論されている。一般には、貴族たちよりも聖職者の方がロタールにとっては御しやすいと考えられている。世俗法廷か教会法廷かという問題自体、のちにヒンクマルによって批判されることになる。
  - 20) テウトベルガは 860 年 1 月の会議では自ら告白することを拒み、グンターが話さう彼を促している。私的告解の内容を暴露したことは大きな問題となり、ヒンクマルの論考でも非難されることになる。
  - 21) 862 年のアーヘン教会会議については、Parisot, pp. 192-195; Heidecker, p. 102.
  - 22) ワルドラダを王妃に正式に迎えたことについて、Parisot, p. 199; Heidecker, p. 103.
  - 23) テウトベルガの逃亡について、Parisot, pp. 179-181; Heidecker, p. 100.
  - 24) ロタールは教皇ニコラウス 1 世に使者を送り、教皇はこの問題を再度審議するために 863 年にメッスで教会会議を開催することになる。教皇はメッスに二人の特使を派遣するが、彼らはロタールに買収されたといわれる。メッスの教会会議ではロタールの離婚が認定されたが、ニコラウス 1 世はこれを認めなかった。



- 25) テウトベルガのロタリングアへの帰還については、Parisot, pp. 279–280; Heidecker, pp. 150–151. ワルドラダの破門については、Parisot, p. 286; Heidecker, p. 151.
- 26) Parisot, pp. 321–322; Heidecker, pp. 176–177.
- 27) ロタールの死について、Parisot, p. 321; Heidecker, p. 175.
- 28) ロタールが法廷決闘を計画していたというのは、シャルル・ル・ショージュ宛の書簡のなかで教皇ニコラウス 1 世が書いていることである。M.G.H. *Epp.* 6, p. 330. 法廷決闘自体は現実には実施されなかった。ニコラウス 1 世の書簡 *Monomachiam* は、その後、レギノ、ブルヒャルト、イヴを経て、グラティアヌスに収録されるもので、法廷決闘を禁ずる教会の立場を表明したものとして伝わっている。Cf. Bartlett, p. 118.
- 29) ロタール 2 世の死を聖体のオルダリーの結果として語る年代記は多い。Cf. Parisot, p. 322, n.5.
- 30) 註 4 にあげた Brown の論文を参照。
- 31) ブラウンにはここで述べた論点の他にも、オルダリーの儀礼的側面を重視する別の議論がある。ブラウンによれば、紛争の末にオルダリーで決着することが決まると、争いは人間の手を離れることになり、そのこと自体が人々を沈静化させる効果を持った。Brown, pp. 312–314.
- 32) ブラウンの論文とそれをめぐる議論については、拙稿「神が二度裁くとき」『日仏歴史学会会報』32, 2017, pp. 3–19.
- 33) オルダリーがいったん提案されるが、結局和解して示談で終わる例は多い。Cf. S. D. White, “Proposing the Ordeal and Avoiding It: Strategy and Power in Western French Litigation, 1050–1110”, in *Cultures of Power. Lordship, Status, and Process in Twelfth-Century Europe*, ed. Th. N. Bisson, Philadelphia, 1995, pp. 89–123.
- 34) オルダリーの結果自体が確定しない例は史料の上では稀である。だが、まったく無いわけではない。前掲拙稿を参照。
- 35) たとえば 11–12 世紀のカルチュレールに記録された土地紛争でも、こうした事例は知られている。
- 36) 858 年の国王法廷の直接の記録は残されていない。各種年代記にもこのときの裁判に関する記述は見られない。わずかな史料としては、860 年 1 月のアーヘン教会会議の要録（これには 8 章からなるものと、7 章からなるものの 2 種類が残されているが、とくに後者の第 2 章）や、同年 2 月のアーヘン教会会議の記録（とくに第 16 章）に 858 年のオルダリーに関する言及がある。これらはいずれもヒンクマルの論考に収録されて唯一伝わっているものである。Textus libelli octo capitulorum, *De divortio*, pp. 115–116; Textus libelli septem capitulorum, pp. 119–120; Tomus prolixus, pp. 121–122. Cf. M.G.H. *Concilia* 4, pp. 1–11. また、論考に収められたヒンクマルの回答からもわずかな情報が得られる。
- 37) Heidecker, p. 67.
- 38) *De divortio*, p. 114 (... iudicio laicorum nobilium et consultu episcoporum atque ipsius regis consensu...); p. 160 (...per consilium laicorum nobilium, consensu episcoporum ac decreto regio...non solum consensu nobilium laicorum, verum, ut audivimus, cum reconciliatione et benedictione episcoporum...).

- 39) ヒンクマルに質問状を送った人々については後述。ロタリングアの宮廷内の状況については、この他にも 860 年と 862 年のアーヘン教会会議に参加しなかった司教や修道院長を調べることで、反ロタール派をある程度推定することが出来る。Cf. Heidecker, p. 76, n.20.
- 40) ロタリングアからの質問状は、ヒンクマル以外にも王国外の他の司教たちに送られたと考えられている。Heidecker, p. 76, n.21.
- 41) ヒンクマルの論考は、唯一の写本がバリの BN に残されている。これは最初の数葉が欠落しており、タイトルは後代につけられたものである。写本および執筆状況については、M.G.H. 版を校定した Böhringer の解説 (*De divortio*, p. 20 ss.) および Stone and West, pp. 16-20. を参照。
- 42) *De divortio*, p. 112 (...quia nuper ad nos quidam ex ecclesiastico, quidam vero ex laicali ordine et pro officii sui loco ac pro religionis merito...) (...sed quantotius tacitis eorum nominibus, a quibus haec proposita fuerant quibusque de propositis rescriberemus...). 匿名にしよう求めていること自体、彼らが宮廷内で苦しい立場にあったことを推測させる。Cf. R. Stone and Ch. West, p. 6. なお、質問者たちの中には 858 年のオルタリーに立ち会って目撃した人々がいることが分かる箇所があり興味深い。*De divortio*, p. 168 (X. INTERROGATIO. Quarto capitulo nobis petimus remandari, si haec causa, unde iudicium factum audivimus et quidam etiam vidimus...).
- 43) 論考の構成については、Stone and West, p. 25.
- 44) 古典的な研究としては、たとえば H. Schrörs, *Hinkmar Erzbischof von Reims, sein Leben und seine Schriften*, Freiburg i. Br., 1884, p. 205; M. Sdrlek, *Hinkmars von Reims kanonistisches Gutachten über die Ehescheidung des Königs Lothar II.*, Freiburg i. Br., 1881, pp. 10-13. Cf. Parisot, pp. 170-171; P.R. McKeon, *Hincmar of Laon and the Carolingian Politics*, Chicago, 1978, pp. 42-43.
- 45) Daudet, pp. 100-101; J. Devise, *Hincmar, archevêque de Reims, 845-882*, t.1, Genève, 1975, pp. 394-396, 408-409.
- 46) このあと触れるストーンとウエストのほか、R. Bof and C. Leyser, "Divorce and remarriage between late antiquity and the early middle ages : canon law and conflict resolution", in *Making Early Medieval Societies. Conflict and Belonging in the Latin West, 300-1200*, eds. K. Cooper and C. Leyser, Cambridge, 2016, pp. 155-180 (とくに p. 173 以下を参照)。
- 47) コミットすることを避けようとしたというのは、たとえば 860 年の教会会議への参加を求められながら、健康を理由にそれを断っているからである。このときにはメスのアドヴェンティウスと、ランのヒンクマルが、ランスに赴いてヒンクマルに打診したことが分かっている。
- 48) *De divortio*, pp. 146-167.
- 49) Stone and West, p. 38.
- 50) *De divortio*, p. 161 (VII. INTERROGATIO. Qui dicunt, quod pro secrete facta confessione ab eadem femina vicarius eius de iudicio incoctus evasit.) テウトベルガの私的告解をめぐる問題については、A. Firey, *A Contrite Heart. Prosecution and Redemp-*

*tion in the Carolingian Empire*, Leiden 2009 (とくに第1章を参照)。

- 51) *De divortio*, p. 163 (VIII. INTERROGATIO. Huic autem dicto, quod aiunt quidam, quoniam intentio illius femine fuit de alio eiusdem nominis fratre suo, quando vicarium suum in iudicium pro se misit, et idcirco se in iudicio isdem vicarius eius non coxit.) これは有名なトリスタン物語のイズーの宣誓を想起させる。イズーの宣誓については、文学研究者によってその系譜が検討されてきたが、これまでテウトベルガとの類似は指摘されてこなかった。
- 52) 後述のように、この点はヒンクマルによる批判の論点のひとつとなっている。
- 53) ヒンクマルは、ペテロの否認をめぐる議論をあげてこの点を論じている。
- 54) 9世紀のオルダリーの典礼書などを見ても、オルダリーを通じて神が被疑者の心の奥を見定める (*scrutator occultorum cordium*) ことが強調されており、オルダリーと内面性が単純に対立していない。この点については、たとえば次の研究を参照。D. Barthélemy, “Présence de l’aveu dans le déroulement des ordales (IX<sup>e</sup> – XIII<sup>e</sup> siècles)”, in *L’Aveu. Antiquité et Moyen Age*, Collection de l’École française de Rome, 88, 1986, pp. 191–214.
- 55) 「信仰心の無さ」については、名前の二重性をめぐる問題のほか、後述の悪魔の介入によるオルダリーの改竄でもヒンクマルによって指摘されることになる。なお、ここでは取り上げることが出来ないが、ヒンクマルの議論の特徴として、さらにレトリックの問題を見る必要がある。ヒンクマルは相手を論駁する際、相手の主張を頭から否定するのではなく、いったんはそれを受け入れて、そのうえで相手に切り返すという独特な論法を取っている。
- 56) よく知られるように、アゴバルは主に法廷決闘を批判するが、オルダリーにも何カ所かで触れている。重要なのは、アゴバルもヒンクマルと同様に神の超越性を強調しながら、ヒンクマルとは反対に神判を否定する点である。
- 57) たとえば、私的告解をすることで異端者がオルダリーで無罪を勝ち取るが、その後、異端に戻ったために再びオルダリーにかけられて有罪になるといった話が12–13世紀には多く書かれた。
- 58) 9世紀と12–13世紀を比較するためには、他にも *crime* と *péché* の区別など検討すべき多くの論点があるが、別の機会を設けたい。
- 59) ストンとウエストが直接取り上げるのは第四の問いと回答である。しかし、この問題はオルダリーの正統性をめぐる第一の問いにもかかわっている。そこでは質問者たちは、人々がオルダリーは呪術 *maleficia* によってその結果が歪められることもあると主張し、だからオルダリーには正統性が無いと噂しているとして、この点についてヒンクマルの意見を求めている。ヒンクマルは、第一の問いに対する回答では *maleficia* について直接答えていない。なお、第一の問いには、他にもオルダリーは人間の発明であり、正統性が無いという噂も挙げられている。これは神判の根幹に触れる問題であり、当時こうした噂があったこと自体興味深い。これに対してヒンクマルは、神判としてのオルダリーを擁護するために長大な議論を展開している。
- 60) *De divortio*, p. 164 (VIII. INTERROGATIO, RESPONSIO. Sed concedamus, ut fraus in iudicio fuerit operatione diaboli...).

- 61) トリック・オーディールについては、R.J. Hexter, *Equivocal Oaths and Ordeals in Medieval Literature*, Cambridge Mass., 1975. 邦語文献として、佐藤専次「中世盛期における誓約の一側面：『トリスタンとイゾルデ』と聖ニコラウス伝にみる』『立命館史学』14, 1993, pp. 98-113.
- 62) これは第1回目の質問状の第6章で論じられている。De divortio, p. 196 ss. この問題については、C. Rider, *Magic and Impotence in the Middle Ages*, Oxford, 2006, p. 31 ss. ヒンクマールはロタール2世とテウトベルガの離婚訴訟の他にも、結婚をめぐる多くの問題にかかわったが、860年のStephanusの離婚問題に関連して、呪術によって悪魔が介入して引き起こされる impotence を論じている。このときの書簡 Si per sotiaras は広く流布し、のちのカノン法集成にも収録された。Rider, pp. 39-42.
- 63) De divortio, p. 167 (Quapropter, si et in hoc iudicio per quodcumque ingenium fraudulentia reperitur, duplicata iudicii ultione sive pro peccati admissione sive pro infideli inlusionem causa in questionem ratione docente reveniat.)
- 64) Stone and West, p. 76. ストーンとウエストも、論考を全体として見れば、pro-Lothar とも anti-Lothar とも単純には言えないとしている。その点からすると、テウトベルガのオルダリーに関しては、ストーンとウエストの評価は pro-Lothar に寄りすぎていると言えるかもしれない。彼らは、ヒンクマールが流動的な状況のなかで、今後の展開次第でテウトベルガの罪が別の形で明らかになることを想定し、そのときにオルダリー一般の正統性が失われることを恐れたのではないかと推測している。これはオルダリー一般と、テウトベルガの個別のオルダリーとを分けて考える説明といえる。これに対して本稿で試みたのは、神を基点にした奥行きのなかでヒンクマールの議論を説明することである。この観点からすれば、ヒンクマールはあらゆる異論を神のもとに包摂することが出来る。個別には譲歩しているように見えて、実はひとつも譲歩していない。
- 65) De divortio, p. 120 (Textus libelli septem capitulorum, c.2: ...unde iudicium postea per ipsorum consilium extitit factum, sed non divina pietas indulgente rei veritatem manifestare voluit...).
- 66) 本文でも見たように、トリック・オーディールの場合には、神判の枠組みそのものには触れずに、神判の結果の持つ意味が無効になってしまう。トリック・オーディールについては、文学研究者たちによって古代にまでさかのぼる系譜が明らかにされてきているが、それらは宣誓に関するものであり、オルダリーとの関連ではテウトベルガの事例が最初期のものだと考えられる。こうした点については別稿を用意したい。